

# 竹内好と〈大東亜戦争〉 ——竹内好「近代の超克」論

糸 瀬 龍

専修大学法学部兼任講師

## はじめに

本稿の対象は竹内好の「近代の超克」である。「竹内好の『近代の超克』」というとき、二つのものが指示されている。まずは、竹内好の論文「近代の超克」(一九五九年)であり、次に、竹内好が終生をかけたといってもよい、思想課題としての「近代の超克」である。本稿は、竹内における二つの「近代の超克」を対象とする一連の考察の端緒を開く。本稿においては、論文「近代の超克」を執筆した竹内の動機が探られる。

## 一・竹内好の論文「近代の超克」と座談会「近代の超克」

竹内好は、一九三一（昭和六）年東京帝国大学支那文学科に入学した。竹内が支那文学科を選んだ理由について松本健一は「かれがここを選んだ理由は、『無試験』であつたことと、弱いものに対する共感しかもプロレタリア文学のなかでも景気のよくない支那文学に魅かれてのこと、である。この後者の理由については、かれみずからが中野重治のなかの朝鮮に対する共感に影響をうけたものだ、と註している。つまり、竹内好の支那文学選択は、かれのヒューマニズムとニヒリズムとの混合の所産であつた」と書いている。本稿にとっては、松本が指摘する二つの理由のうちの後者、「弱いものに対する共感」が重要となる。この「弱いものに対する共感」が、本稿が考察の対象とする竹内の思考過程に影響を及ぼしているからだ。

「近代の超克」という言葉は、戦中から戦後、そして現在に至るまで、一九四二年七月に『文学界』が開催した座談会のタイトルとして流通している。この五文字は、戦時中を襲った一種の「マジナイ語」（三頁）であつたが、竹内はこの言葉を自身の論文のタイトルとした。座談会「近代の超克」が最初に一冊の単行本として出版された際には、当該の座談会の記録と、出席者が座談会の開催前と後に提出し『文学界』に掲載された論文が収録された。竹内論文「近代の超克」は、はじめ『近代日本思想史講座』第七巻「近代化と伝統」（筑摩書房、一九五九年一月）に発表され、のちに『近代の超克』が富山房から出された際（一九七九年）に併載された。今日、座談会「近代の超克」および主題としての「近代の超克」をめぐる議論に、この竹内論文は大きな影響を与えている<sup>3</sup>。この論文は批判的な立場からであるにしてもよく読まれた。竹内の著作中でも最も読まれている論考の一つだといえる。

そうした論文「近代の超克」を書いた竹内が座談会「近代の超克」にどのような評価を与えているかを確認してこう。

座談会「近代の超克」が開催されたのは、一九四二年の七月、太平洋戦争の開戦から約半年後、日本軍の緒戦の勝利が続いていた頃である。座談会は同年の『文学界』九月号、一〇月号に二度に分けて掲載された。出席者は『文学界』の同人を中心に一三名。加えて、京都学派から哲学の西谷啓治と歴史学の鈴木成高の二名、そして、音楽家の諸井三郎、映画批評家で朝日新聞記者でもあった津村秀夫など他分野からのゲストが数名である。当時『文学界』はたびたび同形式の座談会を行っていたが、外部からのゲストを多く集めたこと、また構想から公刊までほぼ一年間を要したことを考えれば、主催者側の『文学界』の力の入れようが伝わってくる。

竹内好の「近代の超克」についての理解に進む前に、まずは座談会「近代の超克」がどのように評価されたのかを確認しておく必要があるだろう。以下は、小田切秀雄の文章である。

太平洋戦争下に行われた「近代の超克」論議は、軍国主義支配体制の「総力戦」の有機的な一部分たる「思想戦」の一翼をなしつつ、近代的、民主主義的な思想体系や生活的諸要求やの絶滅のために行われた思想的カンパニアであった。当時「思想戦」を呼号していた一層粗暴な軍国主義者たち（文壇のなかにも少なからずいた）の活動にたいして、『文学界』グループを中心としたこの論議は、ヨリ知的なスマートな外見を示していたが、本質的には同じコースを進んでいたものであり、それだけに手のこんだ影響を及ぼしていた。「文明開化」と官僚主義への批判という形で日本浪曼派が行ってきた資本主義文明批判はこの論議によってヨリ広い視野のなかにひきだされ、さらに日本の近代社会とその生活・文明・芸術等においての近代的な側面のいびつな展開とそれの伴った弱点がさまざまな角度から論難攻撃され、その結論として軍国主義的な天皇制国家の擁護・理論づけないしその戦争体制の容認・服従とい

うことが思想的カンパニアとして行われたのである。<sup>4</sup>

竹内は、小田切秀雄のこの評価を「歴史の試験答案としてなら満点」(一〇頁)であるとした。みずから「今日の通説」(同前)であると認めた小田切による座談会への評価に、しかし竹内は不満であった。竹内によれば、小田切の評価は、「イデオロギイ截断」(二〇頁)であったからだ。イデオロギイの見地から断罪するのではなく「イデオロギイから思想を抽出する」(一二頁)作業に取りからねばならないとして、竹内は論文「近代の超克」を書くこととなった。竹内はまた、自分たちよりも若年の世代の座談会に対する感想に触れ、「イデオロギイから思想を取り出す」必要を強く感じたと述べている。以下は、座談会が『文学界』に掲載された当時の「インテリ青年」であった仁奈真による、後年の感想である。

十年前、青年たちは、それ『文学界』掲載の座談会「近代の超克」——引用者注——をむさばり読んだ。(中略)学生たちは、じぶんたちを見送る「学徒出陣」の旗と「近代の超克」という悠長な座談会とのあいだには、なんの関係もないのだと信じていたにちがいなかった。あるいは、「何時も同じものがあって、何時も人間は同じものに戦っている——そういう同じもの——というものを貫いていた人がつまり永遠なのです」という小林秀雄の発言などが、兵隊服をきせられた若い学生たちの、良心をささえる唯一のものであったかもしれない。<sup>5</sup>

竹内は、ここに吐露されたような座談会「近代の超克」に対する仁奈ら若年世代の読者の反応——仁奈の感想に引きつけて言い換えれば若者たちを戦場に駆り立てた者の責任を追及したいという心理——を、「怨恨と憎悪と憤怒

と軽蔑」（三八頁）の四種で捉え、仁奈の場合を「怨恨」に分類する（八頁）。そして竹内は、仁奈の反応が座談会当時の多くの若者の声を代弁するものだと書き、この「怨恨」の情が「暴力の本体に向けられないで、かつて自分たちの心の支えであったものへ「逆うらみ」の形で向けられ」（八頁）ている事態への危惧を表明するのである。インテリ青年らの「逆うらみ」はなぜ起こるのか。その原因を竹内は「近代の超克」のシンボル作用を、思想から切り離せないことから来る、あるいは切り離す必要を感じないことから来る、あるいは切り離さないで曖昧にしておいた方が都合がよいという功利または思惟の怠惰から来る、われわれの間の一種の無責任」（同前）に求める。ここで竹内のいう「われわれ」とは、戦時に「近代の超克」という言葉を自己の体験として生きた者（仁奈も含めて）全員を指すとも考えられる。しかし竹内にとって、果たされるべき責任の担い手は、やはり竹内らの世代であるようだ。戦後に思想的営為を継続してゆく知識人にとつての課題としての「近代の超克」を竹内がみずからに課したのはそのためである。竹内にとつて第一の課題は、「シンボルと、思想と、思想の利用者とを区別する」（八九頁）ことである。仁奈ら若い世代がいなく「怨恨」の情が生まれないようにするためには、「思想からイデオロギイを剥離すること、あるいはイデオロギイから思想を抽出する」（一二頁）ことが必要なのである。この竹内の判断はむろん、先に引用した小田切による座談会への評価と決定的に違っている。小田切の評価は「満点」であると言いつつ、その小田切によってイデオロギイ的に徹底的に糾弾された座談会から「思想」を取り出そうとする竹内の取り組みは、竹内は小田切とは異なり、座談会「近代の超克」に対してひよっとすると高い評価を与えているのではないかという予感を読む者に与えるかもしれない。しかし実際にはこの竹内の判断には、この座談会そのものに対する竹内自身による低い評価が大きく影響しているのである。竹内は座談会について次のように評価しており、座談会そのものに対する竹内の評価はこれ以上ではない。

このシンポジウムの記録だけから「近代の超克」という思想の内容を抽出することはできない。「近代の超克」は、戦争とファシズムのイデオロギイを代表するものとして、それに言及するときは「悪名高き」という形容詞を冠せるのがほとんど慣習化されているほど、戦後は悪玉あつかいされているが、いま読み返してみると、これがどうしてそれほど暴威をふるったか、不思議に思われるほど思想的には無内容である。(四頁)

ここでは、「近代の超克」が括弧付きで二度言及されている。竹内は明確に区別していないようにも見えるが、二つの「近代の超克」はそれぞれ別のものを指しているはずだ。すなわち、座談会「近代の超克」と思想としての「近代の超克」である。そのうえで座談会の方について「思想的には無内容」(四頁)と竹内は断定するのである。これを別の表現で言い換えれば、座談会「近代の超克」は思想的に悪ですらない、ということの意味する。竹内好の、座談会「近代の超克」は「失敗」で「思想的には無内容」であるという判断に基づき、座談会への直接的な批判を留保して思想としての「近代の超克」へ接近してゆく手法は、座談会「近代の超克」が思想的には後世が得るものを何も残していないとの判断を出発点としている。これは見方によっては、無内容であるから罪は着せられないという言い方にも映るだろう。こうした竹内の論文「近代の超克」は、発表後すぐに各論者からの批判を受けることとなる。

座談会「近代の超克」の開催とほぼ同時期にはもう一つの「悪名高き」(五頁)座談会「世界史的立場と日本」が開催されている。京都学派の四人の若手哲学者、歴史学者によって開戦以前の一九四一年一月から開戦を挟んで合計三回開かれたこの座談会には、「近代の超克」に参加した西谷啓治と鈴木成高がいた。竹内は、「近代の超克」と同様こちらもあり現実に働きかける力は持たないとしながら、「世界史的立場と日本」の方は「戦争の教義学」、

すなわち戦争の意味づけとしては成功していると見た。「京都学派にとって、教義が大切なのであって、現実はどうでもよかった」（四八頁）のであり、一方「近代の超克」は「世界的立場と日本」とはちがって戦争を意味づけることさえできず、戦争のイデオロギーにさえならなかった、というのが竹内の見解である。「近代の超克」という座談会自体は「思想的には無内容である」から、竹内にとっては「なぜ「近代の超克」が悪名をとどろかしたか、その理由はシンポジウムそのものからは説明されない」（四頁）のである。この評価と関連して以下に引用するのは、竹内好における「近代の超克」を考察するにあたり極めて重要となる、主題としての「近代の超克」についての竹内による把握、また座談会についての竹内の評価が示される箇所である。一読して、先に引いた小田切秀雄とはまったく異なる、対照的といってもよい理解を竹内がもっていたことがわかるだろう。

「近代の超克」は、いわば日本近代史のアポリア（難関）の凝縮であった。復古と維新、尊皇と攘夷、鎖国と開国、国粹と文明開化、東洋と西洋という伝統の基本軸における対抗関係が、総力戦の段階で、永久戦争の理念の解釈をせまられる思想課題を前にして、一挙に問題として爆発したのが「近代の超克」論議であった。だから問題の提出はこの時点では正しかったし、それだけ知識人の関心も集めたのである。その結果が芳しくなかったのは問題の提出とは別の理由からである。戦争の二重性格が腑分けされなかったこと、つまりアポリアがアポリアとして認識の対象にされなかったからであり、そのために保田のもつ破壊力を意味転換に利用するだけの強い思想主体を生み出せなかったからである。したがって、せっかくのアポリアは雲散霧消して、「近代の超克」は公の戦争思想の解説版たるに止まってしまった。（六四―六五頁）

この箇所は、先に引用した、「思想的に無内容」であるという座談会「近代の超克」への竹内による評価と対にな

っている点において重要である。加えて、「歴史の試験答案としてなら満点」と自身が書いた小田切の座談会に対する評価への応答が試みられている点でも興味深い。引用文中には、明治以来の日本を襲ったさまざまな問題が挙げられている。竹内はこれらの諸問題を「日本近代史のアポリア」とし、主題（思想）としての「近代の超克」とは、解消されるべきアポリアの凝縮であったと説くのである。竹内によれば、ところが座談会では、たんに問題の提出だけがなされただけに終わった。「アポリア」が「雲散霧消」してしまっただけのはなぜか。その疑問が、竹内に論文「近代の超克」を書かせるきっかけとなったのだ。背景には、座談会がその真っ只中に置かれていた戦争がある。竹内が着目するのは、座談会で「大東亜戦争の二重性」が問われなかったことである。この「二重性」とは何か。次において、太平洋戦争（大東亜戦争）についての竹内の理解を見ることにより、「近代の超克」に対する彼の問題意識を探ることが可能となる。

### 三・ 一二月八日の意味づけをめぐる

座談会「近代の超克」に対する竹内の評価は、先述の通り、この座談会は「失敗」であったというものだ。この評価の根拠はどこにあるのか。ひとつは、この座談会が後世のある評者からは「放談<sup>7</sup>」として片付けられてしまうように議論の実を結ばなかった一方で、「戦争とファシズムのイデオロギイにすらなりえなかったこと、思想形成を志して思想喪失を結果した」（一七頁）ことである。竹内はそれを座談会の「最大の遺産」（同前）とさえいう。竹内がこの座談会は失敗であったとする根拠はだがもうひとつある。そしてこちらの方が竹内の「近代の超克」執



筆の動機を求める本稿にとってより本質的な問題である。それは座談会において太平洋戦争がどのように位置づけられていたかということに関わる。太平洋戦争をどう捉えるかは、まず二月八日の開戦をどのように迎えたか、また、この戦争の性格をどう理解しているかに関わるといえるだろう。竹内が主題としての「近代の超克」の再評価を論じる際のモチーフも、また荒正人らがそうした竹内の提起を批判するときの根拠も、さらには、座談会「近代の超克」参加者それぞれの関心も、つきつめれば太平洋戦争の理解から生まれるのである。

一月二八日に日本の知識人がどのような感想を抱いたかを見ることは、思想としての「近代の超克」をめぐる竹内の取り組みを考察するうえで見逃すことができない。まずは、竹内が開戦をどのように受けとめたかを見てみよう。竹内の開戦の受け止め方を見ることはこの思想家の思考の経緯を考察するにあたり必須であると思われる。竹内は、武田泰淳とともに発行していた『中国文学』（一九四一年一月、第八九号）に、アメリカ、イギリスとの開戦の報に接した自分を襲った「感動」を次のように記していた。

歴史は作られた。世界は一夜にして変貌した。われらは目のあたりそれを見た。感動に打ち震えながら、虹のように流れる一筋の光芒の行衛を見守った。胸ちにこみ上げてくる、名状しがたいある種の激発するものを感じ取ったのである。（中略）一月二八日、宣戦の大詔が下った日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持であった。（中略）わが日本は、東亜建設の美名に隠れて弱いものいじめをするのではないかと今の今まで疑ってきたのである。

この「宣言」で竹内が吐露した「感動」を、他の文学者が同じ日に得た感想と比較してみよう。竹内論文「近代の超克」への批判の急先鋒である荒正人からの批判の要点は、竹内による「二月八日」の捉え方に向けられても

いるからだ。〈大東亜戦争〉開戦については多くの者が感想を残している。座談会の司会を務め、『文学界』同人による動機を太平洋開戦に際しての「知的戦慄」<sup>9</sup>であったと述べた河上徹太郎は、開戦にあたって次のように書いていた。

太平洋の暗雲という言葉自身、思えば長い、立腐れの状態にあつた言葉である。今開戦になつてそれが霽れたといつては少し当たらないかも知れないが、本当の気持ちには、私にとつて霽れたといつていい程のものである。混沌たる平和は、戦争の純一さに比べて、何と濁つた、不快なものであるか！<sup>10</sup>

竹内と河上の感想を読み比べてみると、河上のほうはまだ感情が抑制されている。とりわけ、「今開戦になつてそれが霽れたといつては少し当たらないかも知れないが、本当の気持ちは、私にとつて霽れたといつていい程のもの」という部分には、歓喜というには遠い感情のしこりが感じられる。次に、『日本文学盛衰史』において開戦にあつての文学者の言動を分析した高見順の反応を見てみよう。高見はまず、自身がいだいた「来るべきものが来たという感じ」に触れ、さらにすすんで桑原武夫が「率直に言つて、日本が非常に悪いことを仕掛けたという自覚はなかった。三日後に英国戦艦プリンス・オブ・ウェールズが撃沈されたときは、今から考えるとおかしいが、とにかくスーッとしたような気持ちだった」と書いたことを引用する。その桑原の文に高見は自身の感想を次のようにながてている。「あの瞬間は私も、日本が非常に悪いことを仕掛けたという自覚はなかった。やった——と飛び上がった、しめた——と欣喜雀躍する、そういうことでは、もちろんなかったが、しかし、私も、スーッとしたような気持ちだったことはたしかだ」<sup>11</sup>。このように書いた高見、および高見が引用した桑原の感想は、開戦にあたって当

時の知識人が持った感想として、おおよそ平均を示すのではないかと思われる。しかしここに付け加えておかねばならないことは、高見が、いま引用した感想をつづったあとで、英米に対する天皇の宣戦布告文を読み「なんとと言えぬもの悲しいおもい」をいただき、「日本というものが、なんとも言えず悲しい」感じをもったと書いていることである。<sup>12</sup>このあたりへ来ると、先に引用した竹内の「宣言」とはまったく様相が異なってくる。高見の感想は、みずから認めるとおり、「戦争反対、戦争憎悪の気持からのものでもなければ、戦争謳歌、開戦歓迎の気持からのものでもない」<sup>13</sup>が、また高見の文には、竹内が戦火の将来に託したような「打ち震え」る感動はなく、「一つに燃え」あがる決意は読み取ることができない。しかし「戦争憎悪」の気持ちはなかったこともまた確かである。では、竹内論文への批判者である荒正人の場合はどうであったか。荒は、開戦について、「私もまた、来るべからざるものが来たと言う衝撃を受けた一人である。（中略）理性の立場で物を考えるかぎり、そんな無謀な戦争はないと確信していた」<sup>14</sup>と書いている。ここまでに見た文章からは、太平洋戦争開戦に接した知識人における三種類の反応が見えてくる。大きく分けるとそれは二通りに分かれるだろう。アメリカ及びイギリスとの開戦を、「来るべきものが来た」と「来るべからざるものが来た」とする捉え方だ。前者は竹内、桑原、高見によって表明され、後者を担うのが荒である。前者の「来るべきものが来た」はさらに二つに分かれる。桑原、高見のものは「いずれ来るであろうものがついに来た」と言い換えることができ、竹内のものは「いつかは来なければならぬものが来た」と言い換え可能である。荒のものは「決して来てはならないものが来た」と、開戦に対する最も強硬な反対派である。桑原、高見の感想には、竹内の感動に比べて、情勢の判断から生じるある種のあきらめが多分に含まれているといえるだろう。

英米との開戦に際して、文学者の反応は以上に見たように様々であるが、竹内の反応は他に挙げた文学者の例と

比べて少々異質である。この原因はなにか。ここには一月八日を境に戦争の質がどのように変わったと竹内が考え、その変化に竹内が何を見、そして英米との開戦に竹内が託したことは何であるかという問題がからんでくる。

#### 四・〈大東亜戦争〉の二重性をめぐって

竹内によれば座談会では解消されてしまった、日本近代史のアポリアの凝縮である「近代の超克」は、思想として再び設定しなおされる必要がある。そのためには、座談会「近代の超克」には欠けていた中国への視点を取り戻さなければならぬ。ただし竹内の認識において、座談会では、前述のとおりその「アポリア」は認識の対象とされず、「雲散霧消」してしまった。戦後日本の「植民地化」(六五頁)はそのアポリアが解消されてしまったことの結果であると竹内は見る。竹内にとって、座談会は問題の提出としてはよかったが、提出されたはずの問題は解かれないままに終わってしまった。一方、司会の河上は、座談会の冒頭で二月八日に触れて「殊に二月八日以来、茲でピタッと一つの型の決まりみたいなものを見せて居る。この型の決まり、これはどうにも言葉では言えない。それを僕は「近代の超克」というのです」と述べている。この河上の言葉は座談会出席者のおおかたの気持ちを代表していると思ふことはできるであろうか。竹内からすれば、「一つの型の決まり」の下に集まった座談会の結果はしかしまったく芳しくなく、「アポリア」が「アポリア」として認識されないままであった。その理由を竹内は、座談会において「戦争の二重性格が腑分けされなかったこと」に求める。竹内のいう「戦争の二重性格」とは何か。これを理解する際の補助となるのが、座談会出席者である亀井勝一郎の、戦後(一九五七年)になってから

の発言である。

明治以来我々がその跡を追ってきた「近代ヨーロッパ」の实体とは何か。それが日本にいかん作用したか。戦争に入ってから日本人自らの道標たるべき日本の原理があるとすればそれは何か。「東洋と西洋」との対決という課題も当然そこに浮び上がっている。この複雑な課題をここで一々検討することはできないが、唯ひとつ、今ふりかえって自分でも驚くことは、「引用者注——座談会において」「中国」がいかなる意味でも問題にされていないことである<sup>15</sup>。

この文を亀井は、座談会「近代の超克」をおよそ一五年後に振り返って記した。これに続く亀井の回想を検討する中で竹内は、亀井の、太平洋戦争は「二重性」をもつという意見に一定の同意を与えている。竹内は、亀井の議論はしかし座談会「近代の超克」を合理化する根拠にはならないと断ったうえで、主題としての「近代の超克」論の今日からの再出発には有効（三四頁）であるとした。（大東亜戦争）の二重性とは、竹内によれば、この戦争が「植民地侵略戦争であると同時に、対帝国主義の戦争でもあった」ことであり、「この二つの側面は、事実上一体化されていたが、論理上は区別されなければならない」（三三—三四頁）とされる。二月八日について河上が書いた「どうにも言葉では言い表せない」と書いたことには、先に竹内が引用した亀井の文章中で言及された「中国の不在」が関係しているのではないか。座談会の席上、河上や亀井の頭にはなぜか中国が欠落していた。竹内にとつては、二月八日以前の中国での一連の出来事は、河上のいうような「混沌たる平和」などではなかった。「一筋の光芒の行衛」を追うことになったと「大東亜戦争と吾等の決意」に記した竹内の頭にはつねに中国の存在が、また中国における日本軍の侵略的軍事行動があったからである。竹内が、戦争を来たるべきものが来た（いつかは来

なければならぬものが来た」と捉えたのはそのためだ。竹内がそれまでいっていた、中国を侵略しているのではないかという苦悩は、一月二日八日によって晴れたかのようにも映る。この竹内の判断は〈大東亜戦争〉をこの戦争の二重性で理解することから生ずる。つきつめれば、〈大東亜戦争〉とは竹内にとって二重性をもつべき戦争だった。この戦争の二重性とは、中国に対する戦争を侵略戦争と見なし、英米との戦争は、「対帝国主義戦争」であるとするものである。この説明を竹内が行なったのは戦後になってからであるが、先に開戦にあたっての竹内の「感動」を伝える文として引用した「大東亜戦争と吾等の決意」にはすでにこの思考の原型を認めることができる。

竹内はこの宣言文のなかで、英米に対する「聖戦」の意義を次のように高らかにうたった。

不敏を恥づ、われらは、いわゆる聖戦の意義を没却した。わが日本は、東亜建設の美名に隠れて弱いものいじめをするのではないかと今の今まで疑ってきたのである。(中略) われらの疑惑は霧消した。美言は人を誑すも、行為は欺くを得ぬ。東亜に新しい秩序を布くといひ、民族を解放することの真意義は、骨身に徹して今やわれらの決意である。(中略) 大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界史上に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂するものこそ、われらである。<sup>16</sup>

この宣言が、武田泰淳と共にいた中国文学研究会の研究誌『中国文学』に掲載されたことは既に述べた。竹内が中国文学を志したのは中野重治が持つ「弱いものへの共感」に影響を受けてのことであると冒頭に書いたが、一月八日以前、満州事変以降の中国における日本軍の行動は、竹内にとって単なる「弱いものいじめ」であった。その鬱屈した竹内の感情を解き放ったのが一月二日八日である。彼を苦しめた「疑惑は霧消し」、東亜には「新しい秩序」が布かれ、民族の解放が目指される。〈大東亜戦争〉は、「支那事変を完遂」するものとされる。一種の開き直

りともとれるこの竹内の「宣言」は、のちに批判を受け、竹内の「転向」とも捉えられる。<sup>17</sup> この批判を意識してか、戦後一八年経ってから、竹内は自身の筆になるこの「宣言」について「大東亜戦争を肯定することに託して日華事変を叩いたわけなんだ」と説明を施している。日中戦争を侵略戦争とし、〈大東亜戦争〉を帝国主義国同士の間争とみる理解が竹内を、座談会で本来扱われるべき問題であった、〈大東亜戦争〉の二重性の把握にたどり着かせたのである。

## 五・思想形成のための「近代の超克」

もちろん竹内にとっても、当の座談会は失敗だったということが大前提である。竹内は、この座談会がもっていた思想の条件の、いわば再構築を図ろうとしているかのようだ。この竹内の態度が荒ら竹内批判者にとって問題になる。荒が苛立ち嘆くのは、この点である。座談会「近代の超克」についてはもちろん、「近代の超克」という主題をふたたび取り上げることさえ、荒にとっては理解できないものであった。座談会「近代の超克」が結果的に「思想的には無内容」（四頁）に終わったという竹内の判断自体は、荒や小田切たちと大きく対立するとは思われない。むしろ両者に共有される理解であると考えてよいだろう。荒たち竹内批判者にとって竹内論文がはらむ最大の問題は、竹内が座談会に思想形成の萌芽を見出そうとしていることなのである。この竹内のモチーフが、荒たちと竹内とのあいだに大きな対立を生じさせたのである。次のような竹内の言葉には、主題としての「近代の超克」へと軸足を移そうと試みる彼の意図を読み取ることができるだろう。ここに表明されるのは、当の座談会が「思想



形成を志した」ものの「失敗」に終わった以上、その試みが持っていた可能性はどこか他から持ってこれなければならぬという竹内のモチーフである。

「近代の超克」は事件としては過ぎ去っている。しかし思想としては過ぎ去っていない。思想として過ぎ去っていないとは、一つは、それによつて記憶が生き残っていて、事あるごとに怨恨あるいは懐旧の情をよびおこすということであり、もう一つは、「近代の超克」が提出している問題のなかのいくつかが今日再提出されているが、それが「近代の超克」と無関係に、あるいは関係をアイマインにして提出されているために、問題の提出そのものがマジメに受け入れられない心理の素地を残しているということである。日本の近代化とか、近代日本の世界史的立場とか、ともかくわれわれ日本人が将来へ向かつて生きていくための目標づくりに欠くことのできない現状認識の重要な項目が、「近代の超克」を理性的に処理していないため、知的探求の対象になりにくいという困難がある。

(五—六頁)

「近代の超克」が提出している問題のなかのいくつかを「今日再提出」しているのが先に仁奈真によって危惧が表明された現代版「近代の超克」である座談会「現代日本の知的運命」(『文学界』一九五二年一月号)であり、これを前にして「理性的に処理」できないでいるのが仁奈に代表される戦後の思想状況なのである。竹内が主張するのは、まず座談会「近代の超克」から主題としての「近代の超克」を引きはがしたうえでこれを「理性的に処理」し、主題としての「近代の超克」を「知的探求の対象」としなければならぬということである。これが竹内に「近代の超克」という論文を書かせたさらにもうひとつの動機である。この座談会に対する仁奈ら若い世代がもった「怨恨」の情はもつともであり、竹内からしても「かなり多くの声を代弁している」(八頁)ようにみえる。しかし竹



内は「近代の超克」そのものが直接に知識青年を死へ駆り立てたのではない、ということをも仁奈たちの世代に向って説く必要を感じる」（同前）のである。「〈大東亜戦争〉の二重性」の議論に続き、竹内が導入するのは、主題としての「近代の超克」を、座談会の欠席者を含めて再検討することである。この際竹内にとって最大の欠席者とは、その人間の「破壊力を意味転換に利用する」（六五頁）ことができなかったと竹内によって名指された保田与重郎である。欠席者も含めたうえで主題としての「近代の超克」を思考した結果の成否、保田をその中心に据えることの是非については次稿における中心課題となるが、竹内論文「近代の超克」の果たした役割として現時点で確認できることは、この論文が、「近代の超克」という主題を同名の座談会から離れた思想の営為として再構築、あるいは再検討しようとする現在にまで続く試みの開始点に存在したということであるだろう。

## 注

1 以下本稿において竹内好論文「近代の超克」からの引用は、『竹内好全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年、三一六七頁より行い、引用直後の丸括弧内に頁番号を記す。

2 松本健一『竹内好論』、岩波書店、二〇〇五年、三〇頁。

3 竹内の論文「近代の超克」について検討した研究には、孫歌『竹内好という問い』（岩波書店、二〇〇五年）、子安宣邦『近代の超克』とは何か』（青土社、二〇〇八年、とくに一八七—二九頁）、菅原潤『近代の超克』再考』（見洋書房、二〇一一年、とくに一六七—一八二頁）、鈴木貞美『近代の超克』——その戦前・戦中・戦後、作品社、二〇一五年、とくに三四〇—三六〇頁）が挙げられる。これらのうち竹内が「近代の超克」において提出した主題に正面から取り組んでいるのは、それぞれの著者の関心の度合いも手伝って、孫と子安の二編であるということになるだろう。うち孫は、「近代の超克」と「世界史的立場と日本」の二つの座談会を原理的に比較し、「近代の超克」の「混乱の原因」（二三九頁）は、あくまでみずからの日常経験から「近代の超克」なり「日本的「肉感」（二四一頁）の優位性を主張する『文学界』同人らと、「日本的肉感を意識する「暇がな」く、あくまで学術的態度から近代を思考しようとする（同前）京都学派との差異にあると見据え、竹内論文を、この両者の対立を超える「火中に

栗をひろう」(二四五頁) 試みであると論じている。これらの四者による「近代の超克」論、及びそれと竹内好との絡み合いの検討については、別稿にて論ずる。

4 小田切秀雄『近代の超克』について、『文学』、一九五八年四月号。〔引用は、『小田切秀雄著作集』第七卷、一九七一年、一五〇頁より〕

5 仁奈真『十年目——『現代日本の知的運命』をめぐる——、『新日本文学』、一九五二年六月号、三七頁。

6 開戦を挟んで三度開催。『中央公論』(一九四二年一月号)〔世界史的立場と日本〕、四月号〔東亜共栄圏の倫理性と歴史性〕、一月号(総力戦の哲学)に掲載。

7 大澤真幸『戦後の思想空間』、筑摩書房、一九九八年、一〇四頁。

8 竹内好『大東亜戦争と吾等の決意(宣言)』、『竹内好全集』第一四卷、筑摩書房、一九八一年、二九四—二九五頁。

9 河上徹太郎『近代の超克』結語、河上徹太郎他・竹内好『近代の超克』、富山房、二〇一〇年、一六六頁。

10 河上徹太郎『光榮ある日』、『文学界』一九四二年一月号、二八頁。

11 高見順『日本文学盛衰史』、文藝春秋、一九八七年、五七六—五七七頁。

12 高見、同書、五七八頁。

13 同前。

14 荒正人『二月八日』、『近代文学』一九六〇年二月号、六頁。

15 亀井勝一郎『現代史の課題』、岩波書店、二〇〇五年、八一—八二頁。

16 竹内好『大東亜戦争と吾等の決意(宣言)』、引用は竹内好『竹内好全集』第一四卷、筑摩書房、一九八一年、二九四—二九八頁、こは二九六頁。

17 鶴見俊輔・竹内好・橋川文三・山田宗睦『大東亜共栄圏の理念と現実』、『思想の科学』一九六三年二月号、引用は鶴見俊輔『鶴見俊輔著作集・先行者たち』、筑摩書房、一九九一年、一三七頁より。

18 同前。

19 竹内論文『近代の超克』の眼目のひとつに、保田与重郎と小林秀雄との「紙一重」の差への着眼がある。竹内の近代の超克論を考察するうえで欠かせない要素である考えられるので、別稿にて論じることとしたい。